

〈原 著〉

## 大学生のレジリエンスと両親への態度・認知との関連

—性差に着目して—

山岸 明子\*

Relationship between resilience in university students and their attitude-cognition  
of their parents centering around sex difference

Akiko YAMAGISHI\*

## Abstract

The purpose of this research was to investigate the relationship between resilience of adolescents and cognition of their parents. Resilience is the concept that refers to positive adaptation in the context of significant risk or adversity. The subjects were 237 university students, 137 males and 100 females. They answered the questionnaire that consisted of three parts: 1) the degree of one's own resilience composed by 6 sub-scales 2) cognition of relationship to their parents composed by 4 sub-scales, 3) cognition of resilience of others including parents. We examined the sex difference in each of the variables and analyzed correlation between each of the variables in each sex.

The results were as follows: 1) As to the relationship to one's mother and cognition of her, female students had higher scores than male students. 2) In male students the relationship between resilience and cognition of their parents was weak, and rare as to cognition of their fathers. In female students, there was significant correlation between resilience and cognition of their fathers, especially sub-scales of intimacy and model. Females who recognized their fathers to be intimate or wished to be like him got high score in pursuit of novelty, positive orientation to the future, meta-cognition, and control of emotion. 3) While in male students, the relationship between resilience and the cognition of their parents' resilience was weak, we found significant correlation in female students to both mother and father.

It was shown that as to the relationship between resilience of adolescents and their cognition of their parents, there were few relationship in males, but some relationships in females.

Key words: resilience, cognition of one' parent, adolescent, sex difference

## I. はじめに

臨床心理学や精神医学の研究は、従来不適應への危険因子 (risk factor) や脆弱性 (vulnerability) の解明を中心に行われてきたが、近年、脅威的な状況に対して適切に対処する力やそれを可能にする個人

のポジティブな側面が注目されるようになってきている<sup>19)</sup>。最近検討されるようになってきている新しい概念の一つに、レジリエンス (resilience) がある<sup>11)~13)</sup>。Werner と Smith は長期の縦断的研究により、脅威的な状況下でも健全に育った子どもたちがいることを示したが<sup>22)</sup>、それがレジリエンス研究の始まりとされ<sup>11)</sup>、困難で脅威的な状況にもかかわらず精神的病理を示さず適應を保つ者の心理的特性やその力動的過程についての研究が行われるように

\* 順天堂大学スポーツ健康科学部  
School of Health and Sports Science, Juntendo  
University

なった<sup>11)12)13)18)</sup>。困難で脅威的な状況として戦争や災害、親の病気や離婚、虐待、慢性的な病気といった特殊な状況から、親の失業や低収入、ネガティブなライフイベント、そして日常生活におけるストレスと様々なものが取り上げられているが、それらに曝されることで一時的に不適応状態に陥っても、精神的病理を示さずにそれを乗り越えることを指す概念である。レジリエンスは個人の特性や能力だけでなく、適応に向けての力動的過程やその結果にも使われ、その定義はまだ必ずしも一定ではない。様々な質問紙法も開発されて、多くの研究がなされているが、レジリエンスを構成する要因についても見解は研究者によりまちまちである<sup>5)18)</sup>。

レジリエンスはコーピングやストレス耐性、あるいは自尊心や自己肯定感という従来からあるポジティブな概念と関連するし、共通する面もあるが、以下の点で違いがある。コーピングやストレス耐性はストレス反応を抑制して適応を保つ心理的な強さであるが、レジリエンスは一時的に不適応状態に陥った後で自分を再構成化して回復する力である<sup>11)18)</sup>。また自分を肯定的にとらえる傾向だけでなく、ものとのとらえ方や自己統制能力、うまくいかない自分を冷静にみつめる能力等も含まれると考えられる。山岸他はそのような観点から、看護学生のレジリエンスを測定し、それらが自尊心とは異なった形でストレスフルな状況(看護実習)の認知や適応に関与していることを示している<sup>24)</sup>。

レジリエンスは生得的なものも含む個人の特性であると共に、環境のあり方の問題でもあり<sup>12)13)</sup>、適切な環境はレジリエンスを促進する要因(protective factor)であるし、レジリエンスの一側面でもある。適切な環境として、安定した家庭環境や親子関係、家庭外でのサポートや安定した学校環境、教育や福祉を受けることを可能にする組織・社会等様々な要因があげられている。Masten 他はレジリエンスを促進する家族要因として「安定した支持的な家庭環境」をあげ、応答的で親密な関係や権威ある養育スタイルが子どものレジリエンスを高めること、また両親の知的レベルやSES(Socioeconomic

status: 社会経済的地位)、子どもを守る資質等が関与するとしている<sup>14)</sup>。

親や家庭環境が子どもの発達に与える影響を明らかにすることは発達心理学の中心的な課題であるが、その影響は幼少期ほど大きく、生活領域がひろがり他の人々との交流が増え、自分が生きる環境を自分で選ぶことが可能になるにつれて、親との関係以外の要因のかかわりが大きくなると考えられている。青年期には親から情緒的に離れたり葛藤がおこったりするとされるが、一方親とのつながりを維持しながら自立する場合もあることが指摘され、青年期においても両親とよい関係をもつことが青年の適応に寄与していることが示されている<sup>1)3)</sup>。

本研究では青年のレジリエンスの程度と両親との関係の関連を検討する。レジリエンスに関しては上述の山岸他<sup>24)</sup>の尺度を用いて青年のレジリエンスの程度をとらえる。両親が青年に与える影響としては、「安定した支持的な家庭環境」の提供と共に両親の行動傾向を取り入れることが考えられるため、本研究では両親との安定したよい関係として「親密性」と「尊敬」の観点、両親の行動傾向の取り入れとして意識的な取り入れである「モデル」と、無意識的な取り入れである「同一視」を取り上げる。西平<sup>15)</sup>は以上の4つの観点から成る枠組み—愛と尊敬の次元と同一視と異質視の次元—から青年の親子関係をとらえる理論を提唱し、それに基づいて若原<sup>20)</sup>が尺度を構成しているため、その尺度を使用する。また両親へのモデリングと関連するものとして、両親がレジリエンス尺度の特性をもっていると認知しているかを青年に問い、その認知と青年のレジリエンス傾向との関連の検討も行う。

なお親子関係に関しては父親と母親、息子と娘で異なることが指摘されており<sup>21)</sup>、青年期から成人期の娘と母親とのつながりや関係のよさについては「一卵性母娘」という用語が近年使われているし、質問紙法や自由記述・面接法でも報告されている<sup>4)21)23)</sup>。一方、父親と娘に関しても、娘は父親から影響を受けていることが指摘されている<sup>7)9)16)17)</sup>。そのような研究を踏まえ、本研究でも

男子と女子を分け、父母別に分析を行う。

## II. 方 法

【研究対象】 首都圏の2つの私立大学の1,2年生.  
A 大学94名(男45名,女49名), B 大学143名(男92名,女51名), 計237名(男137名,女100名).

【調査時期と手続き】 A 大学は2010年1月, B 大学は2009年6月と12月. 講義終了後集団で施行. 無記名でよいこと, 回答は自由意思に基づき, 回答しな

いことで不利益はないことを説明した.

### 【質問項目】

#### ①レジリエンスの傾向

山岸他<sup>24)</sup>で使用された24項目を使用した. それらは小塩他<sup>18)</sup>の肯定的な未来志向性, 新奇性追求, 感情調整, 及び石毛・無藤<sup>6)</sup>の楽観性, 自己志向性, 関係志向性を参考に, 6つの下位尺度(肯定的な未来志向性・楽観性・新奇性追求・感情調整・メタ認知的志向性・関係志向性)各4項目から構成された

表1 レジリエンスの24項目の因子分結果

	I	II	III	IV	V	VI
自分の未来にはきっといいことがあると思う (F)	<b>.831</b>	-.014	.149	.023	.049	.075
将来の見通しは明るいと思う (F)	<b>.822</b>	.012	.114	.044	.095	-.004
自分の将来に希望をもっている (F)	<b>.806</b>	.084	.039	.049	.166	.037
困ったことが起きてもよい方向にもっていけると思う (O)	<b>.611</b>	.051	.046	.138	.191	<b>.419</b>
何事もよい方に考える (O)	<b>.503</b>	-.006	.002	.292	.217	.288
自分には将来の目標がある (F)	<b>.454</b>	.325	.056	.101	.028	.030
自分の判断は適切か考える方だ (M)	-.020	<b>.612</b>	.145	.174	.120	-.285
失敗した時自分のどこが悪かったか考える (M)	-.027	<b>.574</b>	.126	.059	-.010	.048
なぜそうしたのか行動を見直すことがある (M)	-.023	<b>.524</b>	.127	.162	.108	.003
ねばり強い人間だと思う (C)	.190	<b>.496</b>	.052	.121	.003	.197
難しいことでも解決するために色々な方法を考える (M)	.145	<b>.449</b>	-.069	.150	.178	.309
寂しい時や悲しい時は, 自分の気持を人に聞いてもらいたいと思う (R)	.042	.012	<b>.864</b>	-.099	.057	.030
つらい時や悩んでいる時は自分の気持を人に話したいと思う (R)	.115	.045	<b>.823</b>	-.106	-.002	.030
自分の考えを人に聞いてもらいたいと思う (R)	.177	.174	<b>.624</b>	-.119	.171	.005
迷っている時は人の意見を聞きたいと思う (R)	.003	.226	<b>.436</b>	.028	.114	-.121
動揺しても, 自分を落ち着かせることができる (C)	.203	.118	-.098	<b>.777</b>	.089	.078
自分の感情をコントロールできる方だ (C)	.069	.167	-.127	<b>.626</b>	.062	.095
いつも冷静でいられるようにここがけている (C)	-.041	.320	-.055	<b>.616</b>	.098	-.024
ものごとに対する興味や関心が強い方だ (N)	.148	.150	.016	.090	<b>.695</b>	.024
新しいことや珍しいことが好きだ (N)	.054	-.136	.235	.016	<b>.574</b>	.156
私は色々なことを知りたいと思う (N)	.073	.324	.085	.158	<b>.457</b>	-.104
色々なことにチャレンジするのが好きだ (N)	.253	.159	.054	.082	<b>.434</b>	.092
困った時, ふさぎこまないで次の手を考える (O)	.344	.332	-.053	.295	.146	<b>.499</b>
困った時, 考えるだけ考えたらもう悩まない (O)	.252	.093	-.023	.391	.080	.339
寄 与 率 (%)	13.52	9.20	8.82	7.68	6.04	3.96
累積寄与率 (%)	13.52	22.72	31.54	39.21	45.25	49.21

太字は因子負荷量が.400以上のもの

項目の最後の記号は N: 新奇性追求 C: 感情調整 M: メタ認知的志向 F: 肯定的な未来志向 O: 楽観性 R: 関係性志向.

ものである。なおメタ認知的志向性は自分の言動について客観的に考えようとする志向性で、自己志向性の中に自分の感情を調整しようとする項目と共に見られる<sup>6)</sup>が、本研究では独立した一つの下位尺度として設定した。各質問項目は表1の通りである。「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」まで5件法で評定を求めた。

## ②両親への態度

若原<sup>20)</sup>は西平<sup>15)</sup>の親子関係の特質に関する理論枠組みに基づいて親近感 vs 疎遠感、尊敬 vs 軽蔑、同一視-取り入れ、同一視-モデルの4つの下位尺度に関する28項目の質問項目を作成し、因子分析に基づき15項目の尺度を構成している。本研究ではその内14項目を使用し、父母それぞれがどの位あてはまるかを5件法で評定してもらった。

③レジリエンス傾向をもつと思う人 ①のレジリエンス傾向に関してそれらの傾向や特性をもっている人と思う人を、「父親・母親・友人・その他・なし」から選ぶ(複数回答可)。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 得点化

レジリエンスの24項目を因子分析(主因子法)した結果、固有値1以上で6因子が抽出された。バリマックス回転した結果は表1の通りである。第1因子は肯定的な未来志向性と楽観性、第2因子はメタ認知的志向性、第3因子は関係志向性、第4因子は感情調整、第5因子は新奇性追求、第6因子は楽観性で因子負荷が高く、ほぼ前提通りにまとまったため、感情調整の1項目を除く23項目から6つの下位尺度の合計得点を算出した。信頼性係数( $\alpha$ 係数)は、肯定的な未来志向性.828、楽観性.754、感情調整.760、メタ認知的志向性.657、新奇性追求.658、関係志向性.796であった。

両親への態度は父親・母親それぞれ14項目で因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。父親は前提通り第1因子は親近感、第2因子はモデル、第3因子は同一視、第4因子は尊敬で因子負荷が高かったが、2因子で因子負荷が高くなった2項目を除いて、再度因子分析を行った。表2がその結果である。母親も上記の2項目を除いて因子分析を

表2 両親への態度の因子分析

質問項目	I	II	III	IV
父親と一緒にいるところを想像するとギクシャクした感じがする	-.783	-.122	-.002	-.167
父親のことがどうも好きになれない	-.751	-.183	-.198	-.288
父親に親しみを感じている	.661	.332	.137	.168
父親と一緒にいる時、私は自然体でいられる	.633	.398	.087	.086
父親の考え方に少しでも近づきたい	.232	.736	.205	.174
父親のような生き方がしたい	.355	.715	.198	.247
何年後かには自分も父親のようになりたいと思う	.339	.708	.232	.288
父親と同じような行動をしていたと気づくことがある	.032	.200	.730	.128
私の態度には父親に似ている所はない	-.199	.011	-.685	-.102
自分でも気づかない内に父親の考え方に似てしまったと感じる	.020	.318	.677	.045
父親は世間から認められていると思う	.186	.240	.164	.809
父親は社会的に立派な人だと思う	.294	.209	.105	.770
寄与率(%)	20.60	17.62	14.17	13.31
累積寄与率(%)	20.60	38.22	52.39	65.70

太字は因子負荷量が.400以上のもの

行ったところ尊敬とモデルが1つにまとまったが、他は前提通りにまとまった(3因子で累積寄与率は65.94%)。本研究では4つの因子を親密性、モデル、同一視、肯定的評価とし、父母共それらの合計得点を算出した。信頼性係数(α係数)は、父親の親密性.858, モデル.887, 同一視.728, 肯定的評価.858, 母親は親密性.834, モデル.865, 同一視.718, 肯定的評価.739であった。

レジリエンス傾向をもつと思う人に関しては、本研究では24項目中いくつかの項目で「父親」「母親」「友人」「その他」「なし」につけたか、その数をカウントし、得点とした。

### 2. 各尺度の性差

レジリエンスの6尺度、両親への態度各4尺度、周囲の人のレジリエンス傾向の認知度に関して、男女別の平均値を算出し、t検定を行った(表3)。母親との親密性と母親への同一視、母親のレジリエンス傾向の認知は女子の方が得点が有意に高く、女子の方が母親との関係性や認知が良好なことが示された。男子の方が高いのは「レジリエンス傾向をもつ人はいない」の項目だけであった。本人のレジリエンスの6尺度に関しては有意差はみられなかったが、10%水準で男子の方が感情調整、新奇性追求が高く、女子の方が関係性が高い傾向が見られた。

### 3. レジリエンス傾向と親の認知との関連

男女別のレジリエンスの6つの下位尺度の得点と父親・母親の認知の4尺度との相関は表4, 5の通りである。男子学生はレジリエンスと父親の認知との間にほとんど関連はなく(有意なのは親密性と感情調整間の相関が.270, .1台の弱い相関が2つのみ)、むしろ母親の認知との方が関連性はある(.2台が4つ, .1台が3つ見られている)。

女子学生は父親認知との間に関連が見られ、特に親密性やモデルは6尺度のほとんどと有意な相関が見られ、父親のようになりたいかどうか、新奇性追求と.439, 肯定的未来志向.400。メタ認知的志向.395, 感情調整と.359の相関関係にあった。また父親を親密と感じているかも新奇性と.381, 肯定的未来志向と.328の相関が示された。肯定的評価とは

表3 各変数の性別の平均値とt検定の結果

	平均値(標準偏差)		t検定 (t値)
	男子	女子	
レジリエンス			
肯定的未来志向	3.71(0.87)	3.88(0.83)	1.80+
楽観性	3.47(0.88)	3.38(0.96)	
感情調整	3.59(0.84)	3.38(0.91)	
メタ認知的志向	3.98(0.67)	3.89(0.65)	
新奇性追求	4.30(0.58)	4.16(0.58)	
関係性	3.72(0.94)	3.93(0.84)	1.75+
父親への態度			
親密性	3.53(0.95)	3.68(1.16)	
モデル	2.91(1.10)	2.94(1.12)	
同一視	3.56(0.95)	3.71(0.91)	
肯定的評価	3.99(0.98)	3.86(1.06)	
母親への態度			
親密性	4.06(0.80)	4.35(0.83)	2.78**
モデル	2.93(1.00)	3.15(1.16)	2.87**
同一視	3.71(0.78)	4.01(0.75)	
肯定的評価	3.79(0.84)	3.90(0.89)	
レジリエンス得点			
父親	6.33(6.24)	6.45(6.43)	1.98*
母親	6.57(5.95)	8.28(6.92)	
友人	9.40(7.82)	10.73(7.81)	
その他	0.62(2.08)	0.65(2.23)	
誰もいない <sup>1)</sup>	6.50(7.82)	4.35(6.64)	

\*\* P<.01, \* P<.05, +P<.10

1) 「(該当する人が)なし」にチェックされた項目数

4尺度で関連が見られているが、父親との同一視とは関連が見られなかった。一方母親とは親密性やモデルとの関連は各2つの下位尺度で.2台の相関が見られただけであり、同一視や肯定的評価との方が関連が見られた。

### 4. 青年のレジリエンス得点と親のレジリエンス傾向の認知との関連

男女別の相関係数は表6, 7の通りである。男子学生は親がレジリエントであると感じていることと本人のレジリエンス傾向との間の関連は少ないことが示された(有意なのは父親2尺度, 母親1尺度のみであった)。

一方女子学生は父親と母親がレジリエントであると感じていることと、本人のレジリエンスとの間に

表4 レジリエンスの6つの下位尺度と父親・母親の4つの認知との相関(男子)

	父 親				母 親			
	親密性	モデル	同一視	肯定的評価	親密性	モデル	同一視	肯定的評価
肯定的未来志向	.113	.100	.153	.193*	.166	.237**	.133	.128
楽観性	.094	-.006	.063	.107	.196*	.201*	.105	.164
感情調整	.270**	.016	-.102	.083	.138	.079	-.060	.153
メタ認知的志向	.108	.116	.072	.147	.176*	.122	.250**	.014
新奇性追求	.103	.069	.078	.091	.136	.206*	.092	.145
関係性	-.168	.129	.187*	.079	.094	.148	.174*	-.027

\*\* P&lt;.01, \* P&lt;.05

表5 レジリエンスの6つの下位尺度と父親・母親の4つの認知との相関(女子)

	父 親				母 親			
	親密性	モデル	同一視	肯定的評価	親密性	モデル	同一視	肯定的評価
肯定的未来志向	.328***	.400***	.066	.286**	.141	.259**	.297**	.255**
楽観性	.226*	.273**	.067	.253*	.033	.124	.254*	.266**
感情調整	.290**	.359***	.041	.173	.272**	.233*	.110	.187
メタ認知的志向	.304**	.395***	.166	.311**	.054	.130	.172	.310**
新奇性追求	.381***	.439***	.139	.260*	.085	.089	.290**	.146
関係性	.255*	.190	.079	.112	.271**	.171	.147	.241*

\*\*\* P&lt;.001, \*\* P&lt;.01, \* P&lt;.05

表6 レジリエンスの下位尺度の得点と他者のレジリエンス傾向の認知との相関(男子)

	父親	母親	友人	その他	なし
肯定的未来志向	.193*	.143	-.040	-.078	-.099
楽観性	.185*	.228**	-.069	-.054	-.126
感情調整	.126	.168	-.189*	-.043	.020
メタ認知的志向	.122	.013	-.069	.035	-.031
新奇性追求	.099	.053	-.049	.090	.027
関係性	.090	.049	.028	.010	.006

\*\* P&lt;.01, \* P&lt;.05

表7 レジリエンスの下位尺度の得点と他者のレジリエンス傾向の認知との相関(女子)

	父親	母親	友人	その他	なし
肯定的未来志向	.307**	.292**	-.175	.049	-.167
楽観性	.232*	.294**	-.051	-.035	-.063
感情調整	.204*	.269**	-.088	.127	-.141
メタ認知的志向	.285**	.266**	-.054	.098	-.076
新奇性追求	.362**	.197	.112	.113	-.206*
関係性	.193	.177	.003	-.020	.043

\*\* P&lt;.01, \* P&lt;.05

有意な関連が見られている(父親は関係性以外の5尺度, 母親は4尺度)。特に父親がレジリエントであると感じている者は新奇性追求が高く( $r = .362$ ), 肯定的未来志向も比較的高く, 3と共通する傾向が見られた。一方レジリエントな人はいないととらえている者は新奇性との間にマイナス( $r = -.206$ )の相関が示され, 女子においては周囲の

人をレジリエントととらえる方が新奇性追求と関連する可能性が示されている。

#### IV. 討 論

大学生を対象に1) 6つの下位尺度から成るレジリエンス 2) 両親との関係に関する4つの認知 3) 周囲の人がレジリエントであると感じているかを問

う質問紙調査を行った。各尺度の性差の検定と、性別の各尺度間の相関の分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

1) 女子学生の方が母親との関係性や認知が良好である。

2) 男子学生はレジリエンスと両親に対する認知との間の関連は弱く、特に父親に対する認知との関連はほとんど見られなかった。一方女子学生は父親認知との間に関連が見られ、特に親密性やモデルは6尺度のほとんどと有意な相関が見られ、父親を親密と感じていたり父親のようになりたいと思っている者は、新奇性追求、肯定的未来志向、メタ認知的志向、感情調整等の得点が高い傾向がみられた。

3) 男子学生は親がレジリエントであると感じていることと本人のレジリエンス得点との間の関連は少ないが、女子学生においては父母共に両者の間で有意な関連が見られた。

父親と女子青年の関係に関しては、先行研究においても父親との関係がよい女子青年は適応的であることが示されていた。例えば父親との関係と自尊心<sup>8)</sup>、幸福感<sup>17)</sup>、自我同一性<sup>9)</sup>、移行期の不安のなさ<sup>16)</sup>と関連が見られ、職業志向にも影響すること<sup>7)</sup>が示されてきた。本研究の結果はそれらと一致する方向のものであり、更に、父親との関係のよさや父親をレジリエントと感じていることが、困難な状況でもくじけずに回復できるレジリエンスの下位尺度とも関連するという新たな関連を示すことができたといえる。その傾向は特に新奇性追求や肯定的未来志向で見られ、娘から親密に感じられていたり、父親のようになりたいと思われている場合は、父親は女子青年にそのような側面で影響を与えていることが示唆された。自律性を尊重し情緒的に支持する父親の態度と娘の職歴選択に関連が見られたり<sup>7)</sup>、専門的な職業をもち続けた女性は職業選択において父親の影響を強く受けているということの背後に、そのような影響が関与していると考えられる。

女子学生における同一視との関連に関しては、父親と似ていると感じているかとレジリエンス傾向とは関連が見られないが、母親の場合は肯定的未来志

向、楽観性、新奇性追求との相関が有意であった。ギリガンは、男性は愛着対象(母親)と自分が異なることを認識し母親から離れることで発達する一方、女性は母親との同質性を維持しながら発達するとした<sup>2)</sup>が、母親と似ていると感じている者の方がレジリエントなことが示唆されている。

大学生のレジリエンス傾向と両親への態度や認知は、男子学生ではほとんど関連が見られないのに対し、女子学生では関連が見られる場合が多いことが示されたが、今後男女のどのような違いが、この違いに関与しているのかを明らかにしていく必要があると考える。

〈注〉本論文の一部は、日本パーソナリティ心理学会第19回大会(2010年)で発表した。

## 文 献

- 1) コールマン, J.&ヘンドリー, L. (1999/2003). 青年期の本質. 白井利明他訳 ミネルヴァ書房: 京都
- 2) Gilligan, C. (1982). In a different voice: Psychological theory and women's development. Cambridge: Harvard Univ. Press. 岩男寿美子監訳 もうひとつの声—男女の道徳観の違いと女性のアイデンティティ 川島書店 1986.
- 3) 平石賢二 (2008). 思春期・青年期のころ かかわりの中での発達. 北樹出版
- 4) 井森澄江・井上俊也・大井京子・西村純一・斎藤こずゑ (2006). 親子関係の生涯発達 心理学的研究 I 東京家政大学研究紀要 46, 237-244.
- 5) 石井京子 (2009). レジリエンスの定義と研究動向 看護研究, 42-1, 3-14.
- 6) 石毛みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学習場面に着目して—. 教育心理学研究, 53, 356-367.
- 7) 伊藤裕子 (1995). 女子青年の職歴選択と父母の養育態度: 親への評価を媒介として. 青年心理学研究, 7 15-29.
- 8) 伊藤裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達—自尊感情, 身体満足度との関連から. 教育心理学研究, 49-4, 458-468.

- 9) 金子俊子(1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究. 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 10) 春日由美(2000). 日本における父娘関係研究の展望—娘にとっての父親—. 九州大学心理学研究, 1, 157-171.
- 11) 加藤敏(2009). 現代精神医学におけるレジリエンスの概念の意義. 加藤 敏・八木剛平編 レジリエンス—現代精神医学の新しいパラダイム, 金原出版. 1-24.
- 12) Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000) The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development*, 71-3, 543-562.
- 13) Masten, A. S. (2005) Ordinary magic: Resilience processes in development. *American Psychologist*, 56-3, 227-238.
- 14) Masten, A. S. & Powell, J. L. (2003) A resilience framework for research, policy, and practice. In Luthar, S. S. (ed.) *Resilience and vulnerability: Adaptation in the context of childhood adversities*. Cambridge Univ. Press. 1-25.
- 15) 西平直喜(1990). 成人になること. 東大出版会
- 16) 丹羽智美(2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応の過程. *パーソナリティ心理学研究*, 13-2, 156-169.
- 17) 小野寺敦子(2009). 親子関係が青年の無気力感に与える影響—エゴ・レジリエンスが果たす機能—. 目白大学心理学研究, 5, 9-21.
- 18) 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治(2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—. *カウンセリング研究*, 35, 57-65.
- 19) Seligman, E. P. & Csikszentmihalyi, M. (2000) *Positive psychology: An introduction*. *American Psychologist*, 55, 5-14.
- 20) 若原まどか(2003). 青年が認識する親への愛情や尊敬と, 同一視および充実感との関係. *発達心理学研究*, 14-1, 39-50
- 21) 渡邊恵子(1997). 青年期から成人期にわたる父母との心理的関係, *母子研究*, 18, 23-31.
- 22) Werner, E. E. & Smith, R. S. (2001) *Journeys from childhood to midlife: Risk, resilience, and recovery*. Cornell Univ. Press: NY.
- 23) 山岸明子(2009). 成人期女性の現在の母親認知と青年期の母親認知の関連. 及びその規定要因. *青年心理学研究*, 21, 53-68.
- 24) 山岸明子・寺岡三左子・吉武幸恵(2010). 看護援助実習の受けとめ方と Resilience(精神的回復力)及び自尊心との関連. *順天堂大学医療看護研究*, 6, 1-10.

(平成22年9月30日 受付)  
(平成22年11月16日 受理)